進む再活性化プロジェクト

「日本村構想」の実現化へ

「平和ともしび」点火案も

ラーモス移住地のあるサンタ・カタリーナ州は観光資源の発掘に力を入れており、同移住地周辺にはドイツ、オーストリア、イタリア系子孫などの集団地がある。そうした異国情緒漂う集団地を観光資源として整備・援助を行っている。ラーモス移住地も「日本村」として州政府から期待されており、それに応えるべく「再活性化プロジェクト」として具体的な観光地化を目指した取り組みが進行している。同プロジェクトについて同地移住者の山本和憲さん（64、千葉）に聞いた。（川口裕貴記者）

ゲートボール、テニス場、屋根架けイメージ図

1990年代後半から始まった同地の「日本村構想」だが、ラーモス移住地には現在、同移住地文協が管理する桜公園、八角堂、移住者の故・小川和己さんによって遂行された平和の鐘公園、資料館などがある。現状、偶発的に観光者は来るものの安定はしていない。

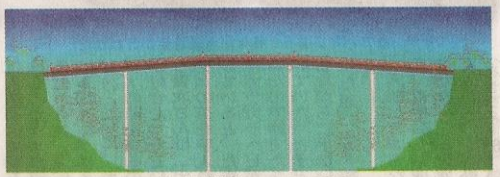
そこで今後「再活性化プロジェクト」として、今ある施設の改修や新たに日本的な宿泊施設や、レジャー公園の新設など観光の目玉を模索している。

そうした中、サンタ・カタリーナ州ブルメナウ市出身で同地移住地で剣道を学んだブラジル人建築士のジェアン・カルロスさんが無償で構想図を提供した。

「描くことにより具体的な計画が進む」と山本さんは語る。

現在、移住地の活性化にとって幸運な出来事が続く。まずフレイ・ロジェリオ―フライ・ブルゴ市間の全長20キロに及ぶ舗装道路が建設中だ。開通により今まで迂回道しかなかった、クリチバノス―ブライ・ブルゴ間の道がつながり、約3～5倍の交通量が増すという。

また桜公園横を流れる川のダム計画に伴い、今まで急流だった川が穏やかになることから、そこにボートを浮かべ、湖畔沿いに遊歩道を整備、桜の植樹により、より日本的な景色が再現される。またその上に架かる旧道の橋を朱塗りの欄干に仕上げ、橋上に藤をはわせるなど実現されれば観光の目玉になるに違いない。



架橋塗装後のイメージ図

現時の桜公園横に架かる旧架橋

50周年事業として

そうした状況の中、「来年の50周年事業に向けて、プロジェクトが一つでも前に合うように努力している」と山本さんは語る。最も現実味があるものとしては、桜公園内にあるゲートボール場とテニス場に、日本風の屋根を設置することがある。

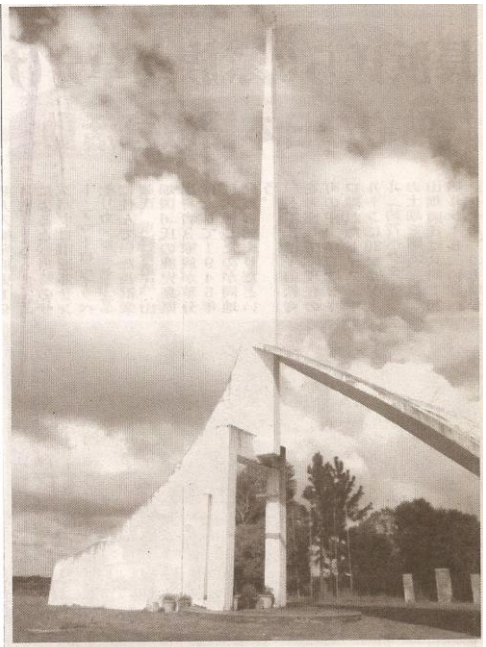
同計画は9年前、前政権時代に助成金が出る見通しが明らかになっていたが、政権が変わり、また書類に不備があったため計画が遅れた。予算は57万レアルで現在書類を作り直し、間もなく提出できるという。順調にいけば、50周年記念式典で着工に踏み切れる可能性があり、「屋根が架かれば大きなイベントがやりやすくなり期待は大きい」と山本さんは語る。

他にも桜祭りのゲストとして数回参加している日本の歌手、井上祐見さんの関係者から連絡があり「何か手伝いがしたい」と山本さんに連絡があったという。同関係者は長崎出身で、同移住地で行っている核廃絶の動きに感銘した人。

連絡によると長崎市にある平和記念公園内に設置されている「平和の鐘公園に持って来る案を検討しており、既に麻生太郎副総理大臣や衆議院議員の小池小百合氏に打診している状況だという。

長崎の平和のともしびはギリシャ、アテネから運ばれた五輪でも使用される聖火で、もし同企画が実現すれば、リオ五輪開催を前に同移住地が一足先に聖火を点火することになり、世界的に注目されるはずだ。

50周年は同移住地の存在を日本、ブラジル両政府にアピールする絶好の機会で、今後、移住地が一丸となって行動したいとしている。なお記念式典は来年4月12日。記念誌も1000部発行の予定で、山本さんが制作実行委員長として現在作成中だ。



平和の塔

桜祭りに来場した人々

観光物産館（八角堂）入口